

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第27輯

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う

仏並遺跡Ⅱ

—— 発掘調査報告書 ——

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第27輯

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う

仏並遺跡Ⅱ

—— 発掘調査報告書 ——



1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



序 文

国道170号線は、大阪府下の北大阪から南大阪を結び生駒山脈と和泉山脈の麓を通過する道路（外環状線と呼称）であります。本道路は京都南部並びに奈良方面から関西国際空港へのアクセス道路として位置づけられています。北部方面は比較的早く供用されていたが、南部方面（丘陵地帯）の供用が遅れ早期に全線が供用出来るよう建設が急がれている道路でありまして、現在河内長野市から泉佐野市にかけて建設が進められており建設予定地に多くの埋蔵文化財包蔵地が所在していることが知られ、道路建設に伴う文化財の取扱いについて大阪府教育委員会と道路建設側の調整がしばしば行われ協議の整った地域から調査等が行っています。

本遺跡は、昭和60年度に約3,000㎡近くの面積の調査を行い、縄文時代早期から晩期にかけての縄文土器が多数出土しております。なかでも縄文時代後期を中心とした集落跡を検出しています。また畿内では非常に珍しい土製仮面も出土し学会からも注目を受けた遺跡であります。

今回の調査は、遺跡範囲がさらに西に広がることが想定されたので昭和61年度に範囲確認調査を行い、その結果遺物の包含が認められたので昭和62年度に発掘調査を行ったものであります。

調査の結果、縄文時代の集落を検出することができなかったが、中世の土城並びに溝等の中世の横山荘関連の遺構を検出する成果をあげることができました。

本発掘調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府土木部、大阪府鳳土木事務所、和泉市教育委員会、その他地元関係者の皆様に多人なるご協力、ご支援を賜り、深く感謝いたします。また、今後の当協会の調査等にご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和63年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

1. 本書は主要地方道枚方・富田林・泉佐野バイパス（大阪外環状線）予定地内、仏並遺跡の発掘調査報告書Ⅱである。
2. 調査は大阪府土木部の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課技師 趙 哲済・岡本敏行・仁木昭夫が担当し、昭和62年9月14日現地調査を開始し、昭和62年10月31日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては大阪府鳳土木事務所及び地元各位の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は趙・岡本の協力を得て仁木が行なった。
6. 本書遺構図中の方位は国土地院第Ⅵ系の座標北を使用し、標高はT・P（m）で表示した。
7. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。水田区画-OZ、溝-OS、土坑-OO、自然流路-OR、その他-OX
8. 本書で使用した土色名は『新版標準土色帖5版』1976・9（小山正忠・竹原秀雄編著）による。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の成果	
第1節 周辺の地形と現況	2
第2節 層序	4
第3節 遺構	7
第4節 遺物	16
第3章 まとめ	19

挿 図 目 次

第1図 仏並遺跡位置図	1
第2図 調査区周辺地形図	3
第3図 遺構配置図及び調査区断面実測図	5～6
第4図 第Ⅱ～Ⅴ層の分布	7
第5図 86-OS、145-OS断面実測図	8
第6図 09-OO、13-OO実測図	10
第7図 88-OO実測図	11
第8図 124-OO、125-OO、154-OO、156-OO、157-OO実測図	13
第9図 06-OR、07-OR、11-OR、153-OR、155-OR集合断面実測図	15
第10図 91-OX、150-OX断面実測図	16
第11図 出土遺物実測図	17
第12図 出土遺物実測図	18

図 版 目 次

- 図版一 遺跡遠景（北から）
調査区遠景（東から）
- 図版二 調査区全景（東から）
- 図版三 A区全景（西から）
C区土坑群（東から）
- 図版四 土坑 88-00（北から）
土坑 09-00（東から）
- 図版五 土坑 13-00（南から）
土坑 124-00、125-00（西から）
- 図版六 土坑 154-00（北から）
土坑 156-00（北から）
- 図版七 出土遺物

第1章 調査に至る経過

仏並遺跡は1973（昭和48）年に大阪文化財センターが大阪府土木部道路課の委託により実施した主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（大阪外環状線）予定路線の河内長野・熊取間の分布調査により発見された遺跡である。

旧和泉国と呼ばれた大阪府の南部地帯は、和泉山脈から幾筋にも伸びた低い丘陵と河川によって、いくつかの谷状の地形を発達させている。

仏並遺跡は旧和泉国の中央やや北よりに位置している。現在の行政区域では大阪府和泉市に所在し、北は泉大津市・高石市・堺市、西は岸和田市と、東は堺市・河内長野市と接し、南は和泉山脈を挟んで和歌山県と接する。（第1図）

遺跡は同市南東部の仏並町に所在し、槻尾川が形成する細長い氾濫原の上の河岸段丘上に遺物の散布があると報告されている²¹。

その後当遺跡にかかわる調査は行われなかったが、泉州沖新空港計画の具体化にともない、当協会が発足し、空港関連事業として外環状線の発掘調査を実施することとなる。

仏並遺跡に関する知見は、先の分布調査以外にはなく、関係各機関の間で協議をかきね昭和60年6月25日現地調査を開始し、同年11月23日調査を終了している。

調査により縄文時代中期末から後期前半の集落の一部を検出し、縄文時代早期末から前期初頭の遺物を含む多量の遺物出土を見ている。また弥生時代の遺物の出土や、上層部で墳墓と考えられる中世土壌群を検出している²²。

昭和61年度には、60年度調査地点から現在の国道170号線を隔てた、河岸段丘中位上面にあたる西側部分の試掘調査を実施している。調査は西方の大池の堤迄の間に10



第1図 仏並遺跡位置図（1/60万）

ヶ所の試掘トレンチを設定して行い、遺構・遺物の有無等の確認をした。^{註3}

今回の調査はこうして得られた成果に基づいて、関係各機関と協議し当該地域についての発掘調査を実施した。

調査区域の設定にあたっては、現状の地形と試掘調査によって得られた成果を基に行った。また調査の方法については、従来⁴の地区割に加えて、調査区内の地形を考慮して便宜的に西からA～Dの地区名を付した。出土遺物の取上げは従来通りの地区割を使用している。本文の記述はA～Dの地区割を使っている。

なお遺跡の地理的環境・歴史的環境は前回の報告書に詳しいのでここでは割愛するが、前回調査地点が中位段丘下面であるのに対して、今回調査地点が中位段丘上面であるという地形的な差異がある。検出した遺構や遺物についても、今回の調査地点では中世～近世を主としているという違いがある。

註1 (財)大阪文化財センター『主要地方遺跡方・富田林・泉佐野バイパス(大阪外環状線)予定路線内埋蔵文化財分布調査報告書』1973・3

註2 (財)大阪府埋蔵文化財協会『仏並遺跡-発掘調査報告書-』1986・3

註3 (財)大阪府埋蔵文化財協会『福頼遺跡・仏並遺跡-試掘調査事業報告書-』1986・8

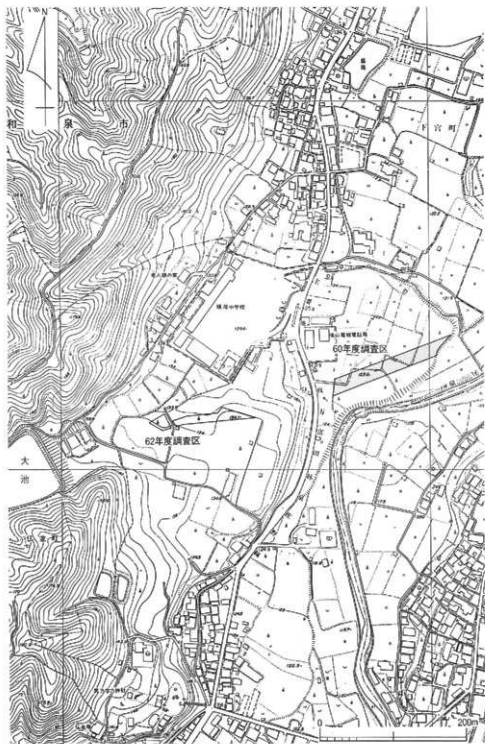
第2章 調査の成果

第1節 周辺の地形と現況

横尾川によって開析された池田谷の上流には、国分峠を境として横山谷と呼ばれる小さな盆地がひらける。横山谷は大別して西半の父鬼川流域の谷と東半の東横尾川流域の谷に分かれる。父鬼川は下流で横尾川と合流し、その横尾川は下流で東横尾川と合流する。仏並遺跡は、父鬼川と横尾川との合流点と横尾川と東横尾川との合流点との中間付近の西岸の河岸段丘上に立地する。

前回調査地点は下宮町から仏並町にかけてつらなる中位段丘下面に位置し、今回調査地点は西に7～8mの比高差をもってつらなる中位段丘上面に位置している。西の丘陵からの谷筋は調査地点の北を東西にはしり沖積段丘面に至っている。

調査区周辺は現在ほとんど果樹園に供されている。北側は丘陵からの谷筋で、西は谷筋の中心部にあたり大池と呼ばれる溜池が築造されている。南は中位段丘上面が丘陵に沿って細長く南へ延びており、東は段丘崖で前回の調査地点の所在する中位段丘下面へと下る。



第2図 調査区周辺地形図 (1/5,000)

調査区の現況も果樹園で標高134m付近に位置する。調査区内においても段差が認められ、東西に長い調査区の中央部付近が最も低い。標高133.50mをはかり、東西両端付近より約0.5m低い。北側にも段差が認められ谷筋へと至る。

第2節 層序

調査区内の堆積土層は各地区により微妙に異なるが、基本的にⅠ～Ⅵ層に分類できる。

第Ⅰ層

現代の耕作土である。灰色・褐色を基調にした暗色を示す。他に暗灰黄色・にぶい黄褐色を示す砂質土もある。厚さ20～40cmをはかる。上面の標高は、A区134m、B区134m、C区133.50～134m、D区134.30mである。

第Ⅱ層

黄褐色を基調とした粘質の土層で、三層に細分できる。上から黄褐色粘質土・灰黄褐色粘質土・褐色粘質土が堆積する。灰黄褐色土は旧耕作土と思われる。厚さ20cmをはかる。Ⅱ層の分布はD区全面とB・C区間の一部に限られている。Ⅱ層出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器・瓦片があるが、いずれも細片で摩耗が著しい。

第Ⅲ層

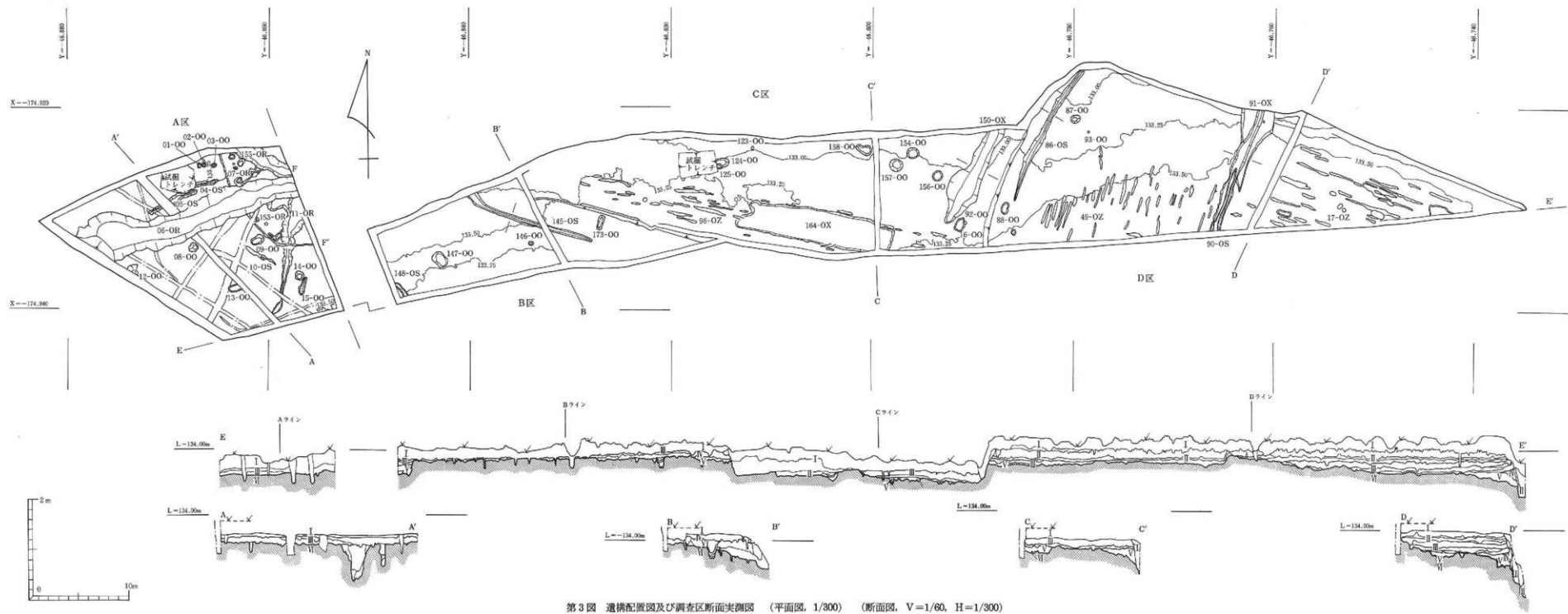
黄褐色を基調とした粘質の土層である。あまり明瞭ではないが、三層に細分することも可能である。A～D区のはほぼ全域に分布している。厚さA区12cm、B区8cm、C区20cm、D区24cmをはかる。Ⅲ層出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器・瓦・陶磁器・サスカイト片がある。

第Ⅳ層

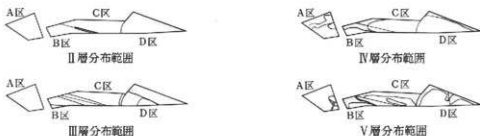
にぶい黄褐色を示す粘質土層である。一部Ⅲ層と似た色調と土質を示す。Ⅳ層の分布は、A区北東部、B区北西部、C区北西部、D区北部に限られている。厚さは各区北側で、A区16cm、B区16cm、C区16cm、D区20cmをはかる。いずれも北側に行く程厚みを増す。Ⅳ層出土遺物は、土師器・瓦器・磁器・サスカイト片がある。

第Ⅴ層

いわゆる中世遺物包含層である。にぶい黄褐色を基調とした粘質土層である。Ⅴ層の分布は、A区北東部、B区南側を除く全面、C区南側を除く全面、D区中央部及び北部と東部に限られている。厚さは各区北側で、A区20cm、B区30cm、C区28cm、D区20cmをはかる。北側に行く程いずれも厚い。Ⅴ層出土遺物は、14世紀～15世紀頃のものを中心として



第3图 遺構配置図及び調査区断面実測図 (平面图, 1/300) (断面図, V=1/60, H=1/300)



第4図 第II～V層の分布 (1/3000)

須臾器・土師器・瓦器・瓦・青磁片が出土した。

第VI層

いわゆる地山である。黄褐色を基調とした土層で土質は一定していない。標高は各区南側で、A区133.50m、B区133.90m、C区133.60m、D区133.90mをはかる。地山面はゆるい起伏をとまないながら北に向かって標高を下げる。

各層出土遺物は、中世遺物を多く含むが、いずれも磨耗が著しく小片がほとんどである。このことは削平・整地の頻度の多さを物語るものであるが、その様相は各層の分布にも見い出せる。とりわけV層の分布は、B区北側(斜面下位)に存在するのに対して、C区南側(斜面上位)には存在しない。このことが示すように、斜面上位が削平され整地されている様相を顕著に示している。

削平・整地が繰返し行われて現在の層序となるが、各層出土の遺物によってその形成時期を明確にすることは困難である。しかし、概ねV層については出土遺物から観て室町時代から近世にかけて堆積した土層であり、II～IV層は近世以降に形成された土層といえる。

第3節 遺構

II層以下各層ごとに遺構の有無を確認しながら掘削を続け、最終的に地山面迄掘削して遺構を検出した。検出した遺構は、水田に関する小溝群3区画・溝7条・土坑24基・自然流路5条・その他を検出した。

1. 小溝群(OZ)

17-OZ

D区東半部で検出した。III層を除去して検出したが北側のV層上面にも存在する。いわゆる鋤溝である。いずれも浅く、深さは3cm程度である。検出長1～6m・幅0.1～0.4mをはかり、西北西-東南東の方向性をもつ。埋土は黄褐色を基調とした砂質土が堆積する。

遺物は、土師器・瓦器の小片が出土した。

49-OZ

D区西半部で検出した。II層を除去して検出したが北側及び西側のIII層上面にも存在する。東側には水田区画を画する溝90-OSが存在する。深さ3cm程度、検出長1~3m、幅0.1~0.4mをはかり、北北東-南南西の方向性をもつ。埋土は黄褐色を基調とした砂質土が堆積する。遺物の出土はない。

96-OZ

C区南半部で検出した。III層を除去して検出したが北側及び東側のV層上面にも存在する。検出長1~3.5m、幅0.1~0.5mをはかり、東北東-西南西の方向性をもつ。一部東西の方向性をもつものもあり、溝の方向の乱れる部分がある。複数の水田区画が重複している可能性がある。埋土と深さ及び出土遺物は17-OZと同じである。

96-OZや17-OZがV層上面に存在し、49-OZがIII層上面に存在することを考えれば、層位的に観て49-OZより古い。

2. 溝 (OS)

04-OS・05-OS・10-OS

A区でIII層を除去して検出した溝である。検出長3.4~5.3m、幅0.4~0.8m、深さ10~64cmをはかる。黄褐色を基調とした砂質土が堆積する。それぞれ遺物の出土はない。

86-OS (第5図)

D区でV層を除去して検出した。検出長14.7m、幅0.2~0.8m、深さ22cmをはかる。埋土は10YR5/8黄褐砂質土が堆積する。埋土には炭及び焼土が混入している。断面形は碗型である。概ね北東の方向を示すがやや東向きに彎曲する。C・D区間に存在する段と平行し、等高線と直交している。遺物は、土師器・瓦器片が出土した。遺物及び層位より観て室町時代に属する。



第5図 86-OS, 145-OS断面実測図 (1/20)

90-O S (第10図)

D区でII層を除去して検出した。検出長13.0m、幅0.2~1.1m、深さ6cmをはかる。埋土は2.5Y6/4にぶい黄砂質土が堆積する。91-O X上に立地しており、49-O Zにかかわる溝である。遺物は、土師器・瓦器片が出土した。

145-O S

B区地山面で検出したが、V層上面より掘込まれた溝である。検出長13.2m、幅0.3~0.8m、深さ8~16cmをはかる。埋土は上層にIV層が堆積するが、下層は黄褐色を基調とした砂質土が堆積する。断面形状は一定ではなく底面に凹凸があり、標高を下げる程深さは浅くなり、幅は広がる。B・C区間に存在する段に添って西北西の方向を示すがやや北向きに屈曲する。遺物は、土師器・瓦器片が出土しているが、遺構の時期を特定することは難しい。層位的に観れば近世以降と思われる。

148-O S

B区西南部でIII層を除去して検出した。検出長2.0m、幅0.4m、深さ10cmをはかる。埋土は上層に10Y R5/8黄褐砂質土、下層に2.5Y6/6明黄褐粘質土が堆積しており、断面形状は碗型を示す。遺物の出土はない。

3. 土坑(O O)

調査区内で検出した土坑は形状・規模などばらつきがある。焼上層や焼壁をもつものや、埋土に炭化物や骨片などを含むものなどがあるが、ほとんど遺物の出土はない。

01-O O・02-O O・03-O O

A区でIII層を除去して検出した。01-O Oは長径0.55m、短径0.35m、深さ7cmをはかる。02-O Oは長径0.45m、短径0.45m、深さ6cmをはかる。03-O Oは長径0.5m、短径0.42m、深さ10cmをはかる。それぞれ形状は不定形を示し、埋土は7.5Y8/2灰白粗砂が堆積している。

08-O O

A区でIII層を除去した地山面で検出した不定形な土坑である。長径0.93m、短径0.8m、深さ45cmをはかる。埋土は灰白色を基調とした粗砂が堆積している。

09-O O (第6図) (図版IV)

A区でIII層を除去した地山面で検出した焼土坑である。長径1.37m、短径0.73m、深さ48cmをはかる。形状は西側が駈む不定形の楕円門を示す。断面形状は底部が平らな迷台形状を示している。埋土は上層から2.5Y6/4にぶい黄砂質土、10Y R4/2灰黄褐粘質土、2.5Y

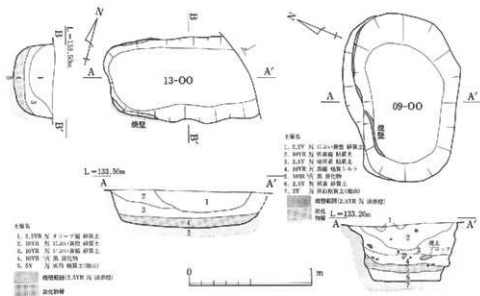
4/2暗灰黄粘質土、10Y R3/1黒褐色粘質シルトが堆積している。最上層以外それぞれ焼土ブロックを含んでおり、さらに下層には10Y R1.7/1黒色を示す炭化物が堆積し、最下層には2.5Y 6/2灰黄砂質土が堆積する。最下層には焼土は含まれず、焼壁は炭化物層より上位の土坑北部周縁に残存しており、焼土ブロックを含む層と焼壁の残存部分はほぼ一致している。焼壁は2.5Y R7/4淡赤橙色を示している。土坑底面の標高は132.88mをはかる。

12-00

A区でIII層を除去した地山面で検出した。長径1.1m、短径0.98m、深さ11cmをはかる。不定形な土坑で、埋土は7.5Y 8/2灰白粗砂が堆積する。

13-00 (第6図) (図版5)

A区でIII層を除去した地山面で検出した焼土坑である。長径残存長1.28m、短径0.7m、深さ33cmをはかる。形状は東西に長い楕円を示す。東側は試掘溝によって断切られており全体の形状は不明である。断面形状は皿型を示し底部は平らにちかい。埋土は上層から2.5Y R4/3オリーブ褐砂質土、10Y R6/3にぶい黄橙砂質土、10Y R5/4にぶい黄褐砂質土が堆積し、さらに下層には10Y R1.7/1黒色を示す炭化物が堆積している。炭化物層の下は地山である。焼壁は西側の南北両壁面に見られ、2.5Y R7/4淡赤橙色を示す。土坑底面の標高は133.08mをはかる。



第6図 09-00, 13-00実測図 (1/30)

14-00・15-00

A区でIII層を除去した地山面で検出した。14-00は長径0.92m、短径0.88m、深さ14cmをはかり、形状はほぼ円形を示す。15-00は長径1.9m、短径0.55m、深さ11cmをはかり、形状は楕円を示す。埋土はそれぞれ10Y R6/4にぶい黄橙砂質土が堆積している。

16-00

C区南東端でIII層を除去した地山面で検出している。長径1.26m、短径0.82m、残存部深さ4cmをはかり、削平が著しい。周辺の地山は焼けており、2.5Y R5/8明赤褐色を示す。北側に集中して2.5Y R1.7/1赤黒色を示す炭化物が堆積していた。

87-00

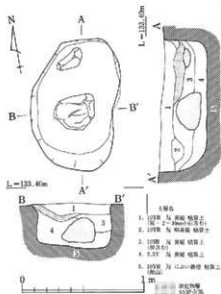
D区北西でV層を除去した地山面で検出している。長径0.95m、短径0.76m、深さ27cmをはかり、形状は楕円を示す。埋土は炭を含む10Y R4/6褐粘質土が堆積している。断面形状は楕型を示す。

88-00 (第7図) (図版四)

D区西端でV層を除去した地山面で検出している。長径1.09m、短径0.68m、深さ37cmをはかる。形状は東側部分がいくぶん屈曲した南北に長い変形の楕円を示す。地山をほぼ垂直に掘込んで、ほぼ平坦な底部へと達するが、東側の一部壁面は袋状に掘られている部分がある。埋土は最上層に10Y R5/8黄褐粘質土(炭・2~10mmの小石含む)が堆積している。その下には北西部に集中して炭化物層がある。つづいて人頭大の石と炭を含む10Y R5/6黄褐粘質土が堆積するが、この人頭大の石の直下から極小の骨片が出土している。この層から最下層の2.5Y 5/6黄褐粘質土にまたがり、さらに大きな33×27×20cmの石が存在する。この石は地山面まで達していない。なお最下層には炭の包含はなく、土坑壁面も焼けていない。骨片の出土により墓塚の可能性が大きい。

92-00

直径0.23mのピット状土坑で、16-00を切込んでいる。深さ10cmで埋土は10Y R4/6褐粘質土が堆積する。



第7図 88-00実測図 (1/30)

93-00・123-00

93-00はD区北西でV層を除去した地山面で検出した。直径0.2m、深さ9cmをはかり、形状は円形を示す。断面形状及び埋土は87-00と同じで、ピット状の上坑である。123-00も直径0.2mのピット状土坑で、断面形状及び埋土も同じである。

124-00 (第8図) (図版五)

C区中央部付近でV層を除去した地山面で検出した。残存長径1.2m、短径0.75m、深さ18cmをはかる。西側部分は試掘トレンチにより切断されている。形状は東西に長い楕円を示す。断面形状は皿型をなし、中央部付近底部は平坦面を示すが、西側に一部凹凸が認められる。埋土は上層を2.5Y7/6明黄褐粘質土が堆積している。下層は10Y R1.7/1黒色炭化物層が堆積している。一部西側に10Y R7/4にぶい黄橙粘質土が堆積する。西側凹凸部には10Y R5/6赤色焼土層がある。これらは焼壁が崩れて落込んだものと思われる。焼壁は北側部分を中心として南側部分にも一部見られる。

125-00 (第8図) (図版五)

124-00と切合う土坑である。V層を除去した地山面で検出している。残存長径0.53m、短径0.46m、深さ28cmをはかり、形状は楕円を示す。断面形状は碗型を示す。埋土は上層を炭を若干含む10Y R5/3にぶい黄褐粘質土、下層を炭・焼土を多く含む2.5Y7/3浅黄粘質土が堆積している。炭化物層及び焼壁は認められない。地山の土色及び土質は124-00と変わらない。

146-00・147-00

B区でV層を除去して検出した。146-00は長径0.45m、短径0.3m、深さ8cmをはかる。埋土は10Y R5/8黄褐粘質土である。147-00は長径1.7m、短径1.1m、深さ36cmをはかる。形状は不定形を示す。西側部分が深く、埋土は黄褐色を基調とした粘質土が堆積する。

154-00 (第8図) (図版六)

C区北東部でV層を除去して検出した焼土坑である。長径1.05m、短径0.96m、深さ25cmをはかり、形状は東西に少し長い隅丸方形を示す。土坑底部及び壁面が良く焼けている。底部の約1/2及び壁面の約1/6が焼けており、焼壁の残存状態が調査区内の焼土坑中一番良好なものである。断面の形状は、遺構肩口よりいくぶん急に落込むが、底部近くでなだらかに屈曲して底部平坦面に至る皿型を示す。埋土は上層に炭を含む2.5Y5/6黄褐粘質土が堆積する。上層はV層に色調が似ているが土質が異なる。下層は焼土ブロック及び炭を多

量に含む2.5Y4/6オリーブ褐粘質土が堆積する。特に土坑底部に接して炭の量が多い。埋土中よりの遺物の出土はなく、焼壁の崩壊により混入したと思われる焼土ブロックが多く含まれていた。土坑は南から北へ緩やかに下降する地山斜面に立地している。

156-00 (第8図) (図版六)

C区北東部でV層を除去して検出した焼土坑である。長径0.96m、短径0.87m、深さ25cmをはかり、形状は東西に少し長く隅丸方形に近い。南側壁面に焼壁が残存する。断面形状は概ね皿型を示すが、底部に凹凸が見られる。平坦面はなく、若干北方向に標高を下げる。埋土はV層に似た黄色・褐色を基調とした粘質土が堆積する。埋土中よりの遺物の出土はなく、各層中に炭を少量含むほか、土坑底部に接して赤色を呈した上層が認められる。

157-00 (第8図)

C区北東部でV層を除去して検出した焼土坑である。長径1.2m、短径1.02m、深さ19cmをはかり、形状は東西に長い楕円を示す。土坑底部と壁面に少し焼壁が残存する。断面形状は皿型を示し底部は平坦である。埋土は上・下層ともに黄褐色系の粘質土層が堆積しているが、下層は少し赤色がかっている。遺物は上層より瓦器碗の小片が出土した。焼土坑群中唯一の出土遺物である。

158-00

C区北東部でV層を除去して検出した焼土坑である。長径1.5m、短径0.8m、深さ26cmをはかり、形状は東西に長い不定形な楕円を示す。南側壁面に一部焼壁を残すのみである。断面形状は碗型を示す。埋土は炭を含んだ10Y R5/8黄褐粘質土であるが、底面近くには焼壁が崩壊したと考えられる堆積層が観察され、そのまわりに特に炭が多い。遺物の出土はない。

173-00

B区でIII層を除去した地山面で検出した。長径1.4m、短径0.5m、深さ46cmをはかる。形状は南北に長い楕円形を示し、断面形状は「U」字型を示す。埋土は上層に2.5Y4/6オリーブ褐粘質土が堆積し、下層には底面と壁面に沿って2.5Y6/2灰黄砂質土が「U」字型に堆積している。

4. 自然流路 (OR)

自然流路はすべてA区で検出した。そのほとんどは複雑に重なり合っている。調査区西方の谷筋からの流路の一時的なものと考えられる。現在もA区のすぐ北側を小川が流れている。流路は5条あり、その内2条は礫溜り状を示すもので、層位的に観て新しい。07-

OR・153-ORがそれで、両者とも黄色を基調とした礫が堆積する。

06-OR (第9図)

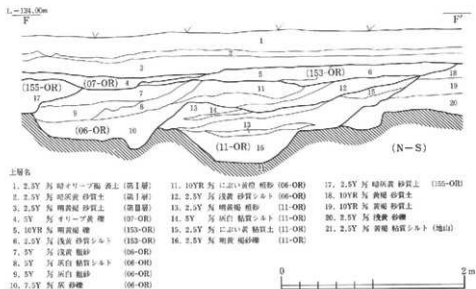
A区をほぼ東西に横断する流路で西から東へ流れる。検出長22.5m、検出最大幅5m、深さ0.8~1.2mをはかる。埋土はシルト・粗砂・砂礫が複雑に堆積する。流心部最下層は砂礫層で、流路内埋土のほとんどは粗砂・砂礫層でしめられているので、短期間のうちに埋没したと思われる。出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器・漆器片などがある。

11-OR (第9図)

A区を南北にはば縦断する流路で南から北へ流れる。検出長11.5m、検出最大幅4.5m、最大の深さ0.9mをはかる。流路は南側で削平を受けて消滅している。流路底部は凹凸が著しい。埋土は粘質土・シルト・粗砂・砂礫が複雑に堆積している。06-OR同様に底部は砂礫層でしめられており、短期間のうちに埋没したと思われる。出土遺物は、瓦器片・石礫がある。

155-OR (第9図)

A区北西端で検出した。北西から南東方向へ流れる流路である。検出長6.5m、検出最大幅2m、最大の深さ0.8mをはかる。検出した流路は一部であり流路全体の様相を推察することは困難である。埋土は砂質土が堆積しており、確認しえた上層のみを視れば比較的ゆっくりと堆積したものであろう。出土遺物は土師器・瓦器片のほか縄文土器の小片も



第9図 06-OR, 07-OR, 11-OR, 153-OR, 155-OR集合断面実測図 (1/40)

数点出土している。

5. その他 (OX)

91-OX (第10図)

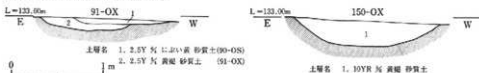
D区中央部でV層を除去して検出した。検出長8.35m、検出最大幅3.15mの北に向かって広がる小谷である。調査区内でその上端部を検出したが、調査区外では削平され消滅している。埋土はV層と大差ない。上面に90-O Sが存在する。

150-OX (第10図)

C区東側でV層を除去して検出した。検出長10.45m、検出最大幅3.1mをはかる小谷で北に向かい広がる。調査区内でその上端部を検出したが、この谷も調査区外では消滅している。埋土及び出土遺物はV層と大差ない。

164-OX

C区中央部南側の96-O Z下層で検出した。東西に長い形状を示す落込みである。幅3.5m、長さ15.8mの範囲で検出したもので、埋土はV層と変わらない。遺物は須臾器・土師器・瓦器片が出土している。



第10図 91-OX, 150-OX断面実測図 (1/40)

第4節 遺物

出土遺物は中世～近世のものがそのほとんどをしめる。コンテナ6箱を数えるが、そのほとんどはII～V層中よりの出土である。遺構よりの出土遺物はコンテナ1箱にも満たず、II～V層中よりの出土遺物は細片が多く摩擦も著しい。図示したものは20点を数えるが、そのほとんどはA区OR群中よりの出土である。他にも染付茶碗や青磁・白磁・陶器・サヌカイト片などの出土遺物があるが、細片がほとんどであり図示しえなかった。

1はD区V層中より出土した尖基無基式石罫で、長さ3.4cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ2.61gをはかる。2は11-O Sより出土した凹基無基式石罫で、長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.95gをはかる。両側線はややくびれ気味で、基部の開きが大きく先端は欠失している。

3～9は瓦器碗である。3は86-O Sより出土した。復元口径12cmで高台部分欠損する。

内面磨き調整されるが、外面は磨減著しく調整は不明である。

13世紀中頃のものであろう。4は07-ORより出土した。復元口径12.8cmで高台部分欠損する。内外面とも磨き調整されている。13世紀後半頃のものであろう。5~7は11-ORより出土した。5は内外面ともに磨き調整されており、外面に指頭圧痕が残る。ほぼ完形で、少し歪みがある。口径13.1cm、

器高3.4cmをはかり、断面三角形の高台が貼り付けられている。6は口径13cm、器高3.4cmをはかり、断面逆台形の低い高台が貼り付けられている。口縁部外面は比較的せまい幅で撫で調整されるほかは、内外面とも磨き調整されており、外面に指頭圧痕が残る。7は口径12.8cm、器高2.9cmで、断面

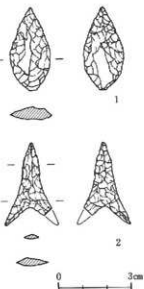
三角形の高台が貼り付けられている。内外面ともに磨き調整されており、外面に指頭圧痕が残る。5は13世紀後半頃、6

は13世紀末~14世紀初頭頃、7は14世紀後半頃のものと思われる。8は06-ORより出土した。口径10.6cm、器高2.9cmで高台はない。口縁部外面はせまい幅で撫で調整されるほかは、内外面ともに磨き調整されている。外面に指頭圧痕が残る。14世紀末~15世紀初頭頃のものであろう。9は157-OOより出土した。復元口径11.6cmで、内外面ともに磨き調整されている。内面にはあまり炭素の吸着が見られない。高台は付かないものと思われる。14世紀末~15世紀初頭頃のものであろう。

10~14は土師器皿である。内外面ともに撫で調整される。10はA区III層中より出土した。復元口径12.2cmをはかる。11はD区IV層中より出土した。口径8.2cm、器高1.4cmをはかる。12は07-ORより出土した。復元口径7.8cmをはかる。13・14は06-ORよりの出土である。13は口径6.9cm、器高1cmをはかり、14は口径7.6cm、器高0.9cmをはかる。

15・17は土師質の羽釜である。15は86-OS上面より出土した。復元口径26.1cm、同鈎径29.4cmをはかる。鈎の幅はせまく、口縁部外面撫で調整される。内面も撫で調整されているが、体部外面簡削りされる。16世紀後半頃のものであろう。17はC区III層中より出土した。復元口径22.6cmで、同鈎径28.8cmをはかる。内外面ともに撫で調整され口縁部に圧痕が残る。14世紀後半~末頃のものであろう。

16・18は瓦質の羽釜である。16はD区III層中より出土した。復元口径24cm、同鈎径28.8cmをはかる。鈎の幅はせまく内外面ともに撫で調整されている。18は06-ORより出土し

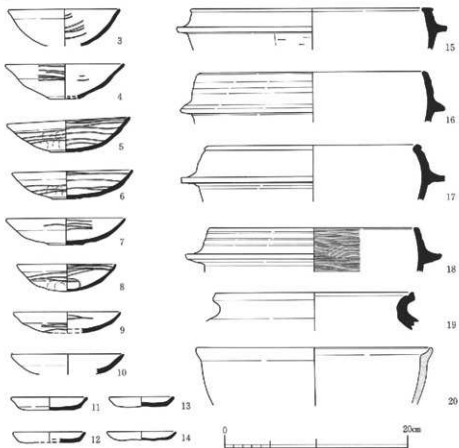


第11図 出土遺物実測図
(2/3)

た。復元口径22.4cm、同跨径28cmをはかる。外面は撫で調整され、口縁部に段を有する。内面は刷毛目調整される。16・18は15世紀中頃のものであろう。

19は164-OXから出土した須恵器壺である。復元口径21.4cmをはかり、内外面ともに撫で調整される。頸部と口縁部内面に煤付着する。胎土は密で焼成も良好である。

20は06-O Rより出土した漆器鉢である。復元口径25.4cmをはかり、内外面ともに黒漆が塗られているが、口縁部内面には黒漆の上に重ねて赤漆が塗られている部分も観察される。



第12図 出土遺物実測図 (1/4)

第3章 まとめ

今回の調査で検出した遺構は中世～近世にかけてのものである。遺物についても、ほとんど中世～近世の範囲に収まる。前回調査地区の中位段丘下面では縄文時代の遺構・遺物を多数検出したが、今回調査地区では自然流路内で土器片数点と石鏃2点を検出したのみで遺構は検出されなかった。これに反して中世～近世の遺構は中位段丘上面にも見られる。

中世遺構のほとんどは、V層を除去して検出している。溝・土坑・谷・落込み・自然流路などを検出した。溝86-OSは、埋土中に焼土塊や炭を多く含む。西側に隣接する焼土坑群との関連が想定される。土坑は形状が楕円・隅丸方形・不定形などさまざまなものがあるが、焼壁をもつもの・微量の骨片を含むもの・微量の炭を含むものなどに大別される。

焼壁をもつ焼土坑は、A区の09-00・13-00の2基とC区北西の154-00・156-00・157-00・158-00の4基及び同区中央の124-00 1基とがまとまりをもって存在する。出土遺物は157-00より14世紀末～15世紀初頭頃の瓦器片が一点出土したのみである。このため、各土坑の時期をこの出土遺物をもって特定するには危険すぎる。前回調査地区で検出した54-00も今回検出焼土坑とおなじ形態を示す²¹。他の土坑についても遺物の出土を見ておらず、用途や性格など焼土坑同様判然としない。

とりわけ88-00については、骨片の出土はあるにしても、土坑中に存在する石の位置やその石もつ意味など不明な点が多い。

17-OZをはじめとする鋤溝遺構は、II～IV層の各層に認められており、調査区内は近世以降繰返し削平・整地されたことがうかがえる。

中世において横山谷一帯は榎尾寺領の荘園となり、横山荘と呼ばれていたが、榎尾寺が横山荘一門を不輸権を持った荘園として領有するのは、鎌倉時代の暦仁元年（1238）であり、13世紀末～14世紀初頭頃までは榎尾寺の全盛期である²²。今回検出した中世遺構は全盛期以降の榎尾寺没落期にあたるものと考えられるが、横山谷の集落の実態など今後解明すべき問題も多く、今後の調査の進展が期待される。

註1 (財)大阪府埋蔵文化財協会『仏並遺跡一発掘調査報告書』1996・3

註2 大阪府教育委員会『和泉横山谷の民俗・I』1975

版 图



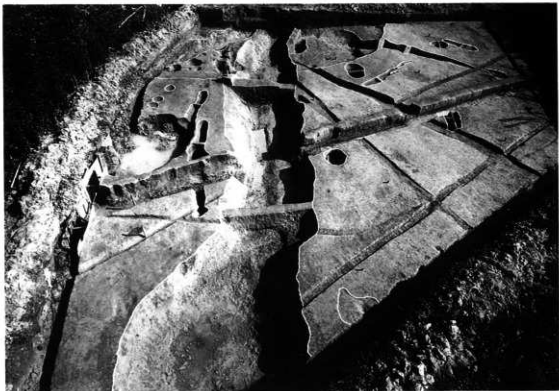
遺跡遠景（北から）



調査区遠景（東から）



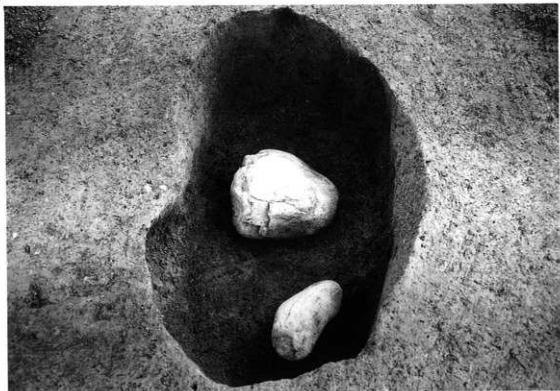
調査区全景（東から）



A区 全景 (西から)



C区 土坑群 (東から)



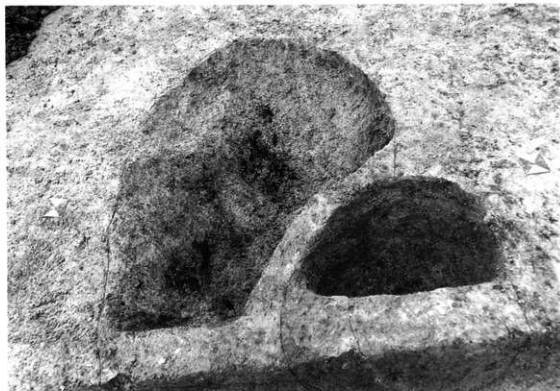
土坑88-00 (北から)



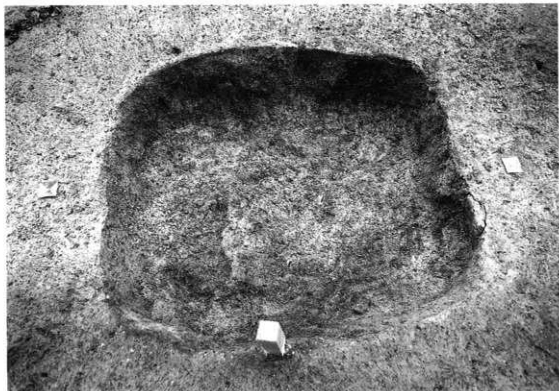
土坑09-00 (東から)



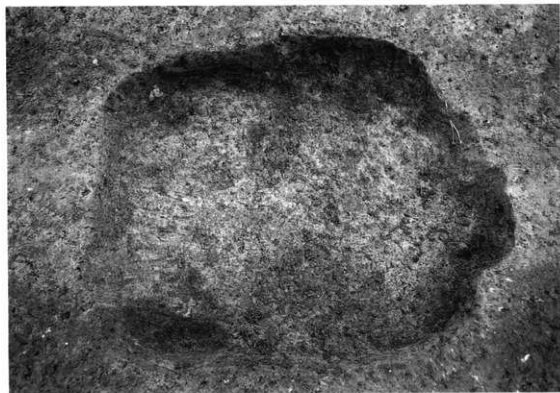
土坑13-00 (南から)



土坑124-00(左)、125-00(右) (西から)



土坑154-00 (北から)



土坑156-00 (北から)



5



11



6



13



8



14



18



1



17



15



16



7



2

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第27輯

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う

仏並遺跡 II

—発掘調査報告書—

昭和63年3月31日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所